

開催地名	熊本県八代市
開催日時	令和8年2月7日(土) 10:00 ~ 11:30
開催場所	八代市役所本庁舎
語り部	小泉 節子(宮城県仙台市)
参加者	約100名
開催経緯	<p>近年、自然災害は激甚化・頻発化の傾向にあり、大規模災害の発生リスクは全国的に高まっている。</p> <p>本市においても、過去の災害対応の経験から、市民一人ひとりの「自助」および地域で支え合う「共助」の重要性を改めて深く認識している。</p> <p>こうした背景を踏まえ、市民の防災意識をより一層醸成し、地域全体の防災力を向上させることを目的として、5回目となる「やつしろ防災フェスタ」を開催した。</p>
内容	<p>(1) はじめに</p> <p>福島で生まれ育ち、大学進学を機に仙台へ移った。最初は保育士として、その後は児童館職員として、ずっと子どもたちの傍らで歩んできた。私生活では3人の息子を育て上げ、現在は中学生から2歳児まで、3人の男の子の孫を持つ「おばあちゃん」でもある。道に迷いやすいというちょっと困った一面もあるが、孫たちと過ごす時間は何よりの宝物だ。私が勤めている「マイスクール児童館」は、小学校の空き教室を活用した施設である。ここは、放課後の小学生だけでなく、日中は乳幼児親子、夕方は中高生、時にはおじいちゃんやおばあちゃんまでが立ち寄る、まさに地域の「茶の間」のような場所。そんな「地域の交差点」に立つ者として、あの日から学んだ大切なことを伝えたいと思う。</p> <p>(2) 被災の記録</p> <p>2011年3月11日。激しい揺れが襲った時、私は児童館で子どもたちを迎える直前だった。訓練では「地震が来たら机の下へ」と教えてきたがいざ本番。校庭にいた子どもたちは、広い屋外の方が安全であるはずなのに、刷り込まれた教訓に従って、パニック状態で建物の中へ、机の下へと駆け込んでいった。大人の指示が届かない極限状態では、平時の「型」だけでは命を守りきれない。状況に応じて自分で判断する力の重要性を、私は身をもって知ったのである。また、内陸部だった私の地域は、津波こそ来なかったものの、帰宅困難者が溢れ、児童館はそのまま避難所となった。家具を支えるはずの突っ張り棒が、揺れの向きによって外れて凶器になる光景。マイナス2度の寒さの中、避難者の方々と肩を寄せ合い、断片的な記憶しか残らないほどの混乱の中で過ごした数日間。あの経験が、私の防災活動の原点にある。</p>

(3) 事前の備え

震災当時、幼い子を抱えたお母さんたちが避難所での泣き声や周囲の視線に悩み、疲弊していく姿を多く見てきた。その教訓から私たちは「乳幼児親子」と「小学生」に向けた独自のプログラムを継続している。

- 乳幼児親子のための「備えの知恵」

「赤ちゃんは我慢ができない」という大前提を共有すること。非常持ち出し袋には、おむつやミルクだけでなく、心を落ち着かせるための「いつものお菓子」や「お気に入りのおもちゃ」を準備しておく。また、大雨や深夜の避難は子どもを抱えては困難である。「早すぎるくらいの避難判断」を、お母さんたちに繰り返し伝えている。

- 小学生への「公衆電話ミッション」

今の小学生はスマホが使えても、公衆電話の使い方は知らないため、10円玉を入れて受話器を取る——この動作を体験させる「街歩き」を毎年行っている。公衆電話を探し、実際に児童館へ電話をかける。この「できた!」という小さな経験が、いざという時に大人を頼り、生き抜くための武器になるのである。

(4) 地域の絆

防災の現場に女性の視点を入れることは、単に「衛生用品が必要」という話だけではない。高齢者、障害のある方、そして子どもたち。地域に潜む多様な「困りごと」に最も早く気づけるのは、日常的にケアを担っている女性たちの感性である。私たちは、地域の女性防災士の皆さんと連携し、ポリ袋での炊飯（パッククッキング）や、非常用トイレの使い方の講習を行っている。お茶を飲みながら被災体験を語り合う「防災トークカフェ」は、心の重荷を降ろす場であると同時に、新しい「顔見知り」を作る場でもあるのだ。避難所でのトラブルの多くは、コミュニケーション不足から生まれる。だからこそ、平時からおしゃべりをしておくことが、最高の防災になるのだ。

(5) 伝えたいこと

防災とは、特別なイベントではなく、児童館が真ん中に立って、子どもたち、近所の老舗のお菓子屋さん、電気屋さん、そして行政を「繋いでいく」日常の活動そのものである。子どもたちが地域の大人を知り、大人が子どもを見守る。そんな「顔の見える関係」が豊かであればあるほど、いざという時の地域の底力は強くなる。

震災を知らない世代が増えていくからこそ、私たちは語り続け、動くことをやめてはいけない。「自分の命を自分で守れる子ども」を一人でも多く育てるこ

と。そして、そんな子どもたちを地域全体で包み込む温かいコミュニティを継続すること。災害は止められないが、被害を最小限にする「繋がり」は、今この瞬間から作ることができる。お互いに頑張りましょう。



開催地より

実体験に基づく具体的な講話は非常に説得力があり、参加者の防災活動への意欲を向上させる貴重な機会となりました。

多大なご示唆をいただいたことに深く感謝申し上げます。

市としても、引き続き各種研修や訓練、補助事業を通じて、地域防災力の更なる強化に努めてまいります。